



鴻文会会報

第 10 号
発行・鴻文会

〒53 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

鴻文会に期待する

鴻文会副会長 有 馬 正 人

(西洋史学・文理第四回卒)

私は昭和三十一年(一九五六年)本学を卒業して縁あって海運界に身を投じて最早三十四年の星霜を経緯した。学部性格から見ても異色な存在かも知れない。幸い仕事は、『水に合った』と言いか限らない海のロマンは私に歳月の経過を感じさせない魅力のある世界で、ドッキリ『塩漬け』になってしまったわけである。

丁度、朝鮮戦争が終焉し、第二次世界大戦によって壊滅した我国の商船隊は鉄鋼、化学工業等の輸出素材を中心とした産業の目覚ましい復興発展と共に往年の海運王国の復活が実現しつつあった時であった。それから二度にわたる石油ショックや幾度なく反復された不況の狭間に翻弄され、併せて我国唯一のユニオン・ショップである全日本海員組合と船主と葛藤の時代から『便宜置籍船』(Flag of convenience)への移行となり、我々が取り扱う外航船舶も目を追って日本籍船が減少を続け、経済戦争による日本商船隊の再度の壊滅の危機に瀕していたのだが、一九八八年頃からの未曾有の好況で漸く蘇生し、とかく立ち上がりの遅い運輸省も『海技の伝承』を真剣に取り組むようになり、省力化された“Pioneer ship”の実証や、外国人乗組員との『混乗』の容認等日本の海運の未来には些か曙光をみられるようになった今日である。その意味では私は戦後の海運の歴史と共に歩んできた一人であり、情熱に任せ、一気に駆け回って居るうちにいつの間にか『港湾の古狸』になった自分を発見した次第である。

考えてみると、実務者としての折り返し点を過ぎ、どうやらゴールに近付いて来て自分の過去を振り返る年代になって来たことを痛感する次第である。

最近では日本人の寿命も延びて、『八〇歳人生』となったと言う。私の友人がこう言った。『ゴルフで言えばアウトコースのラウンドが定年までで、今からはインコースが九ホール残って居ると思わなければならない。これが第二の人生。インコースもアウトと同様に充実したものにすべきだ。尤も命の方が一八番ホールまでもてるかどうかは疑問だが。』これは面

白い現代の比喩であろう。

私は、まだ現役で東奔西走しているが、残念だがもう若者ではない。最近は特に懐旧の情抑え難く、色々な場面にコマメに出向くようになった。旧友と久闊を叙することがたまらなく嬉しい世代となって来た。

今までは『猛烈社員』で友と昔を語り合う時間も裕りもなかったのであるが、今では気分的にも社会的にも余裕が出来てきたのかも知れない。

私は山口大学文学部を卒業したことを無上の誇りとしている。そしてこの学園で学んだ学問が私の実業界での活動に非常に効果的に役立っていると思っ

ている。『文学部』とは、そのように *Enriching* があり、普遍性に富んだ学府であると断言したい。

そして山口大学の中では『少数民族』である。経済、教育、工学、医学等旧

旧制山口高等学校は最終学府へ進学の中継校であっただけに旧制山高出身の諸先輩から見れば我々を『歴史と伝統を継承する嫡子』として認知して戴けるかどうかは問題があるようである。しかし、その半面、旧制山高の先達は高齢となり、その『子孫』が無い限り過去の名門校としてお燈明が消えようとしている。私見であるが、若しそのようなご要望があるならば、『庶子』でも何でも良い。僭越にして非学薄才なれども我々がその灯を引き継ぐことには異論はないと思っ

ている。実は我々にしてもそうである。今や『文学部』はないのだ。昭和二十七年入学、一般教養は経済学部（今の県立美術館）、専門過程では旧制山高校舎（現県立山口高校）、次に旧山口中学跡の校舎（現山口県分室）と変遷を繰り返して実社会へ送り出された。勿論、現在の平川キャンパスには全く馴染みがない。更に組織改革により『人文学部』に分離独立する。

過日、ゼミの同窓会に出て腰を抜かさなばかりに驚倒した。

『コリヤ女子大の同窓会ではないか、』将に時流の変化である。海上保安庁には女性の船長が誕生したり、私が非常勤講師として『海運論』を授業してい

る大島商船高専の商船科（航海・機関コース）にも年毎に女子学生が増えて来ているので一応の理解はしているものの、圧倒的な女性の中で養子のようにおとなしい少数の男子学生という構成には些か『参った。』と言わざるを得ない。三十四年前のあの汗臭い、泥臭いが覇気に満ちた雰囲気は何処にも感じとることは出来なかった。（当り前の事だが、古い硬派学生の眩きと読んで戴きたい。）だからこそ、私が主将として全国に覇を競い、幾度となく国体に出場し勝利したボクシング部の跡形もなく消滅してしまっているのも頷ける。余談だが現在私は徳山大学の学生を暇をみてはコーチし、三年がかりで中国地区の覇者としても伝説を守り活躍している。『山口大学が残っていれば…』と酒を飲んで仲間達と慨嘆している次第である。

話が横道にそれてしまったが、我々『少数民族』は、それだけにやりようによつては最もまとまり易い。ここで我々の心の寄りどころとして『鴻文会』の諸君が伝統の灯を燃やし続けて欲しいと祈願している。

『人文学部』も単なる高等学校の教員の養成機関では無いはずである。固定観念を捨て、報道機関、学者、公務員、金融機関、企業人或いは政治家（我々の同期の吉井惇一君は昨年防府市長となった。）あらゆる分野で雄飛すべきであり、それこそ『人文学部』で学んだ価値があると言わなければならないだろうか。

前述の如く、私は『文学部』で学んだことに限りない誇りをもっているし、業務上もその学問を十分に活用することが出来た。

従って、私は決して例外的存在ではないと思うし、将来とも多方面に飛躍する人材養成機関として発展して欲しいと願っている。同時に我々『少数民族』は色々な世代、色々な分野の諸氏を糾合して、山口大学で最も素晴らしい同窓組織に行きたいと切望している。

県立山口高校の先輩でもある大塚会長を補け、出来る限りの支援を惜しまない決意であるので、諸兄のご協力をお願い申し上げる次第である。

（徳山海陸運送(株)取締役業務部長）

「第十二回委員会の報告」とお願い

鴻文会会長 大塚博久

(中国哲学・文理第四回卒)

去る六月九日、前年の総会で新たに選出された役員によって構成された、平成二年度「第十二回委員会」を開催致しました。

この委員会では、総会から委任された「第三期」の運営の具体化に関わる二つの



案件をまず協議しました。その第一は、各地に鴻文会の支部を設置する方針についてであります。以前から卒業生は各専攻毎に同窓組織を作り、定期的な会合したり、なかには機関誌を発行するなど活発に活動しておられます。また卒業生毎の同期会も頻りに開かれておると聞き及んでおります。鴻文会は、今や文理三、二回、人文九回という年齢の拡がり、三、三〇〇人の会員数を擁する組織となり、会員は全国各地に雄飛して活躍されている現状です。このタテ、ヨコの組織を各地域において有機化し、これを結節点として全体の運営に反映することができれば、今後さらなる組織の発展を期待できます。支部の組織化はその地域の会員相互の人間関係の緊密化にも役立つものと思われま。

したがって、委員会は、このたび、県内各市はもとより、比較的会員数の多い、首都圏、中京圏、関西圏、岡山市、広島市、北九州市、福岡市在住のみならず、「支部結成」のお願いをすることに致しました。何卒私どもの意のあるところをお汲み下され、御多忙とは存じますが御協力をお願い申し上げます。とくに年長の会員の方々には特段の御尽力をお願い申し上げます。今後、この点につき具体的なお願いを致す予定ですので、その節はよろしくお願い申しあげます。

運営具体化の第二として、前述のごとく組織が拡大し、年々会員数が増加していく現状に対して、少数の学内幹事が余暇をひねり出して執行しているのが会の事務態勢では、会員の現況を正確に把握することが次第に困難となつてきております。宛名書き等の仕事も手作業での処理は限界にきております。こうした窮状の打開を委員会に諮ったところ、事務近代化のために、「会員名簿」の管理をも兼ねて、パソコンを導入してはどうか、一〇〇万円程度の支出は認めてもよいという意向が示されましたので、今後、適切なシステム方法を検討し具体的な金額を確定したいと存じます。その段階で、すでに計上されている承認済みの予算の補正を行うことも承認されました。この点についても御理解を得たいと存じます。



次に、これは、鴻文会の歴史に関わることであり、また今後の組織や運営にも関わることでありますが、周知の通り、文理学部・人文学部の前身母体は旧制「官立山口高等学校」であります。しかし、その同窓会組織においては相互に独立に運営されて今日に至っております。これは他の「旧制高校」とその後継学部同窓会の多くが一体または連携して運営されている実状からすれば異例のことに属します。この点に関しては、和田敏英前会長が「会報」第九号に言及されているような事情も過去に介在しておりました。和田先生ご自身、旧制山高同窓会「鴻南会」の会員でもあり、在任中よりその関係正常化のため種々ご努力を重ねてこられました。

一方、旧制山高同窓会「鴻南会」は、一九八九年(平成元年)山口高校開校七〇周年記念大会の開催を通じて全国理事会の確立、本部事務局の山口大学内設置の実現を機に本会との緊密化を決定され、六月五日、小澤太郎会長、山野芳樹事務局長が来訪されて、正式に次のような申入れをされました。

一、山口大学文理学部が旧制山口高等学校を基盤に開設された経緯に鑑み、私どもは今後貴会との関係を深めてゆきたいと希望いたします。

二、このため同窓会相互の関係を深める

方策について今後定期的に協議ができればよいお願いいたします。」

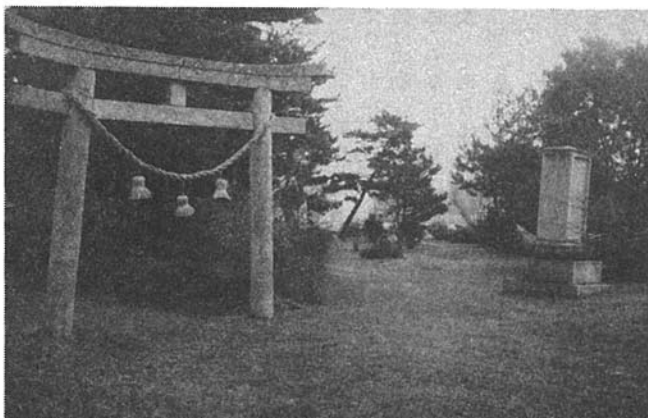
わが鴻文会としては、この申入れを委員会に諮り、兄弟同窓会たる『理学部同窓会』とも連絡して具体的方法を三者で協議すること、の承認を得ました。わが会の発足に当り、その愛称を『鴻文会』と命名した理由のひとつとして、輝かしい先輩同窓会の学統を継承するという意図が込められておりましたから、今回の申入れと委員会の承認は慶賀すべきことであり、わが会の組織の発展にも大いに寄与するものと考えます。『鴻南』『鴻文』両同窓会は、その後事務局レベルで数回の会合をもち、提携の具体案につきいろいろ協議をしておりますので、実現可能などころから除々に提案ご了承を得ることになろうかと存じます。

以上三点についてご報告申しましたが、ほんの数年前には、大学入学適齢の十八歳人口が急速に減少することが予測され、このところ拡大の一途を辿ってきた全国各大学は、その質的充実を目指して構造的努力を傾けなければ淘汰も有りうるという深刻な事態を迎えます。国立大学とも安閑と座視しえない現実であります。母校もこれに対処してさまざまな施策を考究中のごと存じますが、これに伴ってわが鴻文会もバックアップの体制を整えるべく、早急に組織、運営の強化が求められているのであります。支部の設置、事務の近代化、『鴻南会』との連携強化は、いずれもこの課題に直結する措置であること確信致します。会員のみならず今後ますますのご支援ご協力を切にお願い申し上げます。

山口点描(その一)

長沢の池再訪

あの日は、山口市を出発してどのような足を使って「長沢の池」を訪れたのであろうか、記憶に残っていない。一九六五年(昭和40年)の5月から6月のたぶん日曜日だったはず。その年入学の教養生たちのための親睦会。まだ学生がマイカーなど持たない時代ではないし、と言って自転車でおいてそれで行ける距離でもない。70人いた文学科生のほとんどが参加しており、そんな銀輪部隊(おっと時代が一気に戦前に逆もどり?)が大挙して



出掛けていったような記憶もないから、マイクロバスかスクールバスでも借りたのかと思う。当時はまだ自治会の活動がそれなりに活発で、とりまじめ役のクラスの前議員が二、三人はいて、その日も色々趣向をこらした催しがあった。フォークダンスに興じ、手がきの歌声歌集をみながら次々に歌った。声を揃えて歌うなんて、考えてみれば何と純情な青年ばかり。

我らの思いはそれはただひとつ、なつかしき祖国永遠に栄えよ! 黒の学生服に灰色のスボンが男子学生の最高のお洒落だった時代。筆者など、高校の三年間、体育のフォークダンスでも女高生の手に触れたこともなかった。願いかなって、心臓が早鐘のよう。何もかもあの日が初めてだった。

昨年の同窓会に、その日配られた自己紹介のパンフレットを持参してきた男がいた。その物持ちのよさには感心させられたが、確か、大学祭で上演した創作劇『伊吹島』の脚本も残しているような口吻だった。その用紙も記憶もセピア色だけど、辿ってきた自分の軌跡を大事にして、彼の胸の内に共感した。あの頃のあの打ち込みようは何だったのか。行動の基準が「受験」として「どうか」だったやりに「受験」として「競争者でない友人を得て思うさま呼吸していたのだと思う。」

25年ぶりの長沢の池はほとんど昔のまま、のたたずまい。大村神社の前が少し整備されているぐらいで、あの日松の落葉がびっしりと散り敷いていた中洲のような島は、今も変わりはない。写真の右端が

その一角である。真中に入った小さな空き地も、今日訪れてみると「この程度の狭い広場だったのか」と思われるほどにあっけない。ここに皆が集っていたのだろうか。

山口の町並みの変貌に比べ、四辻、鋤銭司あたりは昔のまま、時間が停止していたかのような錯覚にとらわれる。

冬の今の時期、池の水は落ちて随分干潟が目立つ。人の影はなく、遠く水鳥の影と落ち葉をたく煙が見えてのどかな景色。友よ再び来りて遊べ。



私の中の山大・山口

恩師のことなど

廣井(旧姓 嘉副)糸子
(東洋史学・文理第十七回卒)

昭和四十年に入學し、文化大革命にゆれる中国への関心が、東洋史研究室の学生ばかりでなく、大学を取りまいていたような時期に学生時代を過ごし、小畑龍男先生がお一人で、静かに、奮闘されていました。

専攻生が、全学年あわせても十数名といたったころでした。明代の里甲制について、小畑先生が「ノートが、そのまま本になるような」と誰かが評していたように、端正な文章の譚義をされてきました。



（兵庫県立但馬農業高校教諭）

卒業後、就職の御報告を山口でして以来、お逢いする機会も持たず、二十年近く経ってしまっておりました。一週間ほどして見覚えのある先生の賀状を頂き、お元氣でお過ごしなのだと、大変なつかしい氣持で何度も手にしたものでした。

二ヶ月ほどして、突然の山口からの電話で先生の訃報を受け、ことばがありませんでした。無理をして書いて頂いたのではなかったのかと、改めて有難く、申しわけなく思い続けています。

この二十余年の年月は、子育てを両親をはじめとして多くの人々に助けられ、風のように時が過ぎたという感じがします。目の前の仕事や生活に追われ流されがちな日常で、山口にもなかなか足を運べません。小郡の駅を新幹線で通過するたびになつかしく思います。

先日、娘に「お母さんも、オバタリアンになったわねえ」と言われ「ちがうわよ。だんだん人間が伸びやかになって、物事にとらわれなくなったのよ」と反論しながら、やっぱり、そうなのかもしれないと思います。

山口での自分がどこまで歩いてこれたのかわかりませんが、私のスタートの地点であったことは疑えませんが、古い山口での四年間、思い出すのは、古い女子寮への新緑の楓におおわれた参道、後河原、自転車で行った石舟庭、狭い研究室での小畑先生の温和なお顔です。あの頃は、自分のことばかりで、先生の優しさが何もわかっていなかったのだと思います。

先生の御冥福をお祈りいたします。
(兵庫県立但馬農業高校教諭)

いま山大・山口は

国語学・国文学研究室

卒業生各位の御清栄の程を大慶に存じ上げます。国語国文学研究室の最近の様子を御報告致します。

大学祭の季節になりました。来る年も、又来る年も変わることなく、初志を受け継いで、今年も又学生達が、驚流の狂言を上演します。夜ごと遅くまで練習している有志の学生の群像の一つ一つに、受け継がれ、そして過ぎ去った時の重みが表象されます。このことより青春の足音を残して去って行かれた、いわゆる先輩の横顔も思い出されれます。一年に一度の開店、一杯飲み屋の「火の車」も、世の荒波に消えることなく、今年も健在の様であります。結構儲かっていると聞きました。

近頃は学生数も増えました。総勢八十八名の大人数であります。大学院の学生が五名、中国からの留学生が二名、同じく中国からの研究生が二名含まれます。国際化の時代、世界の各地で日本語が学習されており、これ以後研究室もさらに多くの外国人留学生を迎えることになるでしょう。

例年のことではありますが、五月の学芸会、十一月の懇話会と、回を重ねて、それなりの成果も上る充実したものとなりまして、「山口国文」の第十四号がまもなく発刊されます。学会等に毎年御参会下さる方はもとより、はるかに、遠い昔の人となられた方も、今一度「昔を今になすよし」でもありますれば、今浦島になっ

ていただき、例会に御参集下さいませ。御案内申し上げます。山口国語国文学会も発展的解消となりました。私達の国語部国語国文学会に、より一層の御尽力をお願い致します。教官は一昨年柴田勝二氏(現代文学、演劇専攻、阪大院)を加えて五名皆無事元氣に消光しております。御休心下さい。

今年近代文学会九州支部大会、国語学会中国四国支部大会の開催、西日本国語国文学会の事務局担当等、それぞれの関係教官は多忙でありました。来る年ごとに学生の氣質も変わります。大学の存在意義も多様化して参ります。その中にあって、国語国文学研究室は輝きと静けさ(騒々しさ)を失うことがない、と約束したいものです。閑話の余徳は智の再生にあります。良い折には研究室にお立ち寄り下さい。

秋日下 澣 敬白
(石井大教授)



人文学部教官紹介

学部長(併)	八木 充	社会学	小川 全夫
人文学科	八木 充	社会心理学	ウオン・チャールズ・チョイ
哲学	武宮 正男	社会人類学	佐々木 真弓
倫理学	松本 正男	助教授	山本 真弓
中国哲学	遠藤 徹三	講義	山本 真弓
中国思想史	高木 昭三	国語学	関 一雄
日本思想史	山田 一洗	国文学	添田 建治郎
美学・美術史	石原 達二	中国語学	柴田 精二
国史学	奥津 聖二	中国語学	入谷 仙介
東洋史学	畑地 正憲	中国語学	富平 美波
西洋史学	滝野 正二	英語学	浅見 洋二
考古学	山口 房二	英語学	山本 和之
社会学	木下 謙二	ドイツ語学・ドイツ文学	岩部 浩三
助教授	中村 友博	フランス語学・フランス文学	アレクサンダー・ブルース
助教授	近藤 喬一	ドイツ語学	岡光 一浩
助教授	尼川 創二	言語学	井上 三朗
助教授	小谷 典子	埋蔵文化財資料館	河村 吉行

回想二十余年

田中 晋 (文理第十四回卒)

山口大学を卒業して、いつしか二十余年の歳月が流れ去った。このたび幸にして母校に職を得、郷里に帰ることができた。感慨一人のものがある。

私の在学当時、文学部は亀山の東にあった。木造二階建ての校舎があった。今ではその跡地に立派な図書館が立ち、前面の道路も美しい並木で装いを新たにしている。文学部も「人文」と「理」に改組され、場所も平川の地に移っている。このころから、昔を偲ぶよすがもなく、いわゆる時移り物替わるの感慨が深い。

学生時代に教えていただいた、岡崎虎雄、池本喬、田中美輝夫の各先生方はすでに亡くなられて久しい。時の流れとは言えさびしさを禁じ得ない。小西邦太郎先生が京の地に、吉武博、山本泰男両先生が山口に御健在、中田裕二先生は甲南女子大、吉田徹夫先生は九州大でそれぞれ御活躍のことはうれしき限りである。

ところで人文の和田敏英、山本和之両先生に拝眉して、私ははじめて母校に帰ったとの実感を得たのである。もとより両先生も私も昔日の面影ではないが、両先生を通して私の脳裡に蘇るものは昔の山大である。

山口大を卒業し、京都大学大学院に学び、弱冠二十五歳で九州大学教養部に赴任した。学園紛争の末期である、大学は荒廃の極みにあった。そこで学生委員をやらされ、ヘルメット連中を相手に随分やりあった。当時九大には元気のいい先

生達が大勢いて、相手からも「学内機動隊」などと恐れられたものである。しかしヘルメット相手の仕事は随分疲れるので、慰労の意味で飲む機会が多くなった。お蔭で酒の量が増えてしまった。その影響は今に及んでいる。しかし懐かしく想い出すのは、九大には教官も、職員も一体となって、学園を正常化しようとする熱意があったことである。

その九大に十三年勤め、京大へ転任した。ここでは、すでに消えたはずのヘルメットがまだ生きているのには驚いた。生きてはいるだけではなく、大手を振って授業を妨害して歩く、これに対して大学側は何もしようとしないのにはお驚いた、さすが京大は古いものを大切にす土地柄だと感心もした。観光客も「生き化石」を見にわざわざ京大教養部の正門前まで来るそうである。しかし、京大には京大ならではの美点があった。ここにはお互い干渉せず、干渉もされぬ大きな自由がある、ゆったり構えてのびのびと勉強ができるのである。この自由を、しかし、愚かにもはきちがえると、とてもないことになる。京大に入学しただけで満足し、勉強をやめてしまった学生の末路は哀れである。

私はこの二つのがった型の大学を経験できたことは、自分の人生にとって大きなプラスであったと思う。山口大学で新しい一歩を踏み出すことになった今、そうして今年四月に勤続二十年となったこの年、これまでの体験を糧として、母校のために微力を尽くしたいと、あらた

めて思うのである。山紫水明の平川の里に幸あれ。
(英米文学・助教授)

はじめまして

富平美波

ある職業や趣味を持っている人に、「何故そのようなことを始められたのですか」と尋ねることは、ありそうなことのように思いますが、私はこれまでほとんどそういう質問をされたことがありません。「困惑させても気の毒」そんなところが隠すより現れるからでしょう。たしかに、私が大学に残っているのも、周囲の環境を変えようと思いません。幼稚園以来慣れきった、唯一の社会生活が、学校であるわけですから。で、学部受験のころからもう、できればいつまでも置いていたかどうかという下心がきざしていたようです。

それでも、専攻したい学科だけは、受験前から決めておりました。高校の漢文の授業で教えられる漢詩は、律詩や絶句が主なので、教科書流の毎行一句の印刷ですと、きれいな長方形になります。漢字には一字ごとに独立した意味がありますから、それはまるで高雅なクロスワードパズルのように、一字一字の持つイメージが縦横に斜めに擦れ合い響きあってさやさやと鳴っている、もののような気が（その当時は）したのでして、それを真に味わうためにも、沢山の漢字とその用法を知りたいと思うようになったのです。中国語学・文学の講座がある大学となるとさして数も多くはないので、選択に

手間どることもなく行く先が決まり、そこで中国語の初歩の手ほどきを受けました。この時教えて下さったのは、学内でも授業の進行の厳格さと言葉つきの濃厚な成果を挙げられたとはいえませんが、そのころ何をどのように身につければよいかのかがわかりかけたのは、ここ一、二年のことです。それでも、文法の基礎事項で、いまなお知識があやふやだったり、その存在を知らなかったりするものは、大抵、当時病欠などで授業を聴きのがした箇所にあたり、入門の授業とは恐ろしいものだと思います。専門科目の授業に至っては、テーマが何か理解できるまでに何年もかかりました。

そんなふうで四年も過ぎ、首尾よく大学院に入れていただきましたが、さすがにここでは、やむにやまれぬ探求心に燃えて進学された他の方々のような努力はとてもしない（しようともしてない）ことがすぐに発見されてしまいました。その都度ショックから立ち直るのに多大の時間を要し、それが稼働時間を食



いつぶすので、差はますます広がるばかり（情けない）。その状況は現在でも変わりませんが、投げやりな厚かましさが身についた分、いささかは作業の能率が上がったのではないかと考えております。そのような私が、思いがけなく職場を与えられ、あまつさえこのような大学に

昨年にひきつづき

山口大学人文学部 公開講演・公開講座が開かれた

第三回公開講演

テーマ「言葉と文学」
とき 一九九〇年六月十六日（土）
サンライフ防府
（防府中高年齢労働者福祉センター）

演題 「言葉と人・社会」

講師 人文学部 添田建治郎助教授
講演概要 言語は歴史的に見て絶えず変化を遂げているが、そのような変化をもたらす要因は何か。色々な言語変化の姿を通して、人間研究の一端に触れることができなにかと思う。

演題 「文学の現在」

講師 人文学部 柴田 勝二助教授
講演概要 現在いわゆる純文学の世界では、かつてのような物語的な完結性をもたない小説が多く書かれるようになったが、それはどういったところから生じてきた流れなのか。また、現代におい

来させていただいたことについては、ただ感謝と不安があるのみですが、これといったん深刻につきつめだすと手も足も出なくなりそうですので、日頃は失礼をしております。今後ともよろしくご鞭撻のほどお願い申し上げます。
（中国語専任講師）

て文学が扱いうる主題とはどのようなものでありうるのか。そうした問題を、大江健三郎、村上健次、村上春樹といった第一線で活躍している作家を取り上げてお話ししたい。

第二回山口大学人文学部公開講座

生きる知恵 一哲学からの光一
一九九〇年十月六日～十一月十七日まで
毎週土曜日（六回シリーズ）
山口大学学生会館

「人間と技術」一ギリシア人の知恵一 武宮 諒 教授
「知性と意志」一間違えることの大事さ一 村上 勝三 助教授
「自我と自由」一生きる確かさ一 松本 正男 助教授
「真理と解放」一真の自由を求めて一 遠藤 徹 教授

九五名の方々が熱心に聴講、学問の真隨に触れたとの感。再聴講の希望多し。

平成元年度事業報告

- 元年. 5. 26 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(岡光幹事出席)
 6. 10 第10回役員会
 10. 6 第11回役員会
 11. 11 第3回総会 鴻文会会員名簿1989年版配布
 2年. 1. 30 「鴻文会会報第9号」発刊

平成元年度収支決算書

収入の部

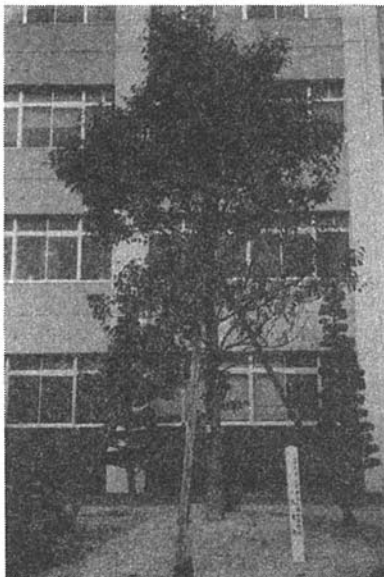
科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
繰越金	7,305,971 円	7,305,971 円	0 円	前年度より繰越金
会費収入	1,500,000	1,315,000	△ 185,000	5,000円×263
雑収入	200,000	355,990	△ 155,990	証券、預金利子183,990円 総会 懇親会費152,000円、理学部より20,000円
合計	9,005,971	8,976,961	10,694	

支出の部

科目	当初予算額	決算額	比較増減	摘要
会議費	80,000 円	35,090 円	44,910 円	役員会車代(第10回、11回)他
総会費	120,000	46,000	74,000	講演謝金30,000円、当日アルバイト他16,000円
印刷費	1,300,000	1,663,709	△ 363,709	名簿用封筒、葉書刷り込み97,673円、会員 名簿作成費1,400,000円、会報印刷作成費 (3,150部)166,036円
郵送費	1,538,000	1,410,090	127,910	役員会案内葉書 2,870円 名簿作成用葉書 207,725円 総会、懇親会案内272,670円 名簿、会報郵送料 926,825円
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	170,000	227,500	△ 57,500	名簿作成アルバイト102,500円、総会・懇親会案内 アルバイト40,000円、名簿会報送付アルバイト 45,000円、幹事用謝金40,000円
雑費	20,000	178,522	△158,522	総会・懇親会費147,710円 用紙代、フィルム代、DPE代他 30,812円
予備費 次年度へ繰越金	5,497,971	0	5,497,971	
合計	9,005,971	8,976,961		

平成2年6月9日 監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監事 竹内通弘 印
芳西靖幸 印



左の写真は一昨年秋に人文学部
 創立10周年を記念して植樹した
 「くすのき」です。鴻文会が寄贈し
 た若木。まだ支柱がとれませんが、
 大分根付いたようで、旧文理時代
 の食堂横の大木のようにぐんぐん
 伸びていってほしいものです。

平成2年度事業計画(案)

1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(6月1日)
2. 第12回役員会(6月9日)
3. 鴻文会名簿作成(10月)
4. 「鴻文会会報第10号」発行(12月)
5. その他

平成2年度予算(案)

収入の部

科 目	2年度予算額	元年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	5,316,050 円	7,305,971 円	△1,989,921 円	
会費収入	1,150,000	1,500,000	△ 350,000	5,000円×230
雑収入	200,000	200,000	0	証券、預金利子ほか
合 計	6,666,050	9,005,971	△2,339,921	

支出の部

科 目	2年度予算額	元年度予算額	比較増減	摘 要
会議費	100,000 円	80,000 円	20,000 円	役員会その他 100,000円(車代等含む)
総会費	0	120,000	△ 120,000	
印刷費	200,000	1,300,000	△1,100,000	会報印刷作成費(3,400部) 200,000円
郵送費	228,000	1,538,000	△1,310,000	役員会用葉書 2,000円 会報郵送料(72円×3,000) 通信連絡費 10,000円
寄付金費	100,000	100,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	90,000	170,000	△ 80,000	会報用宛名書きアルバイト 40,000円 幹事用等謝金 40,000円 その他 10,000円
雑費	20,000	20,000	0	文具類、写真他
予備費	5,928,050	5,497,971	430,079	
合 計	6,666,050	9,005,971	△2,339,921	



鴻文会名簿一九八九年版ご利用
 いただいておりますでしょうか。なか
 なか転居先不明の方の空欄が埋ま
 りません。皆様のご存じの情報が
 ありましたら、事務局あてお知ら
 せ下さい。

山口点描(その二)

龍蔵寺

龍蔵寺は、藤原中期の大日如来が本尊という真言宗の古寺。大学から北西へ五キロほどの吉敷の山ふところにある。千三百余年前に開山され大内、毛利の守護寺として人々の信仰を集めたという。こうして龍蔵寺の境内に立つのは本当に久しぶりのこと。

20年近い歳月は人を変え、目にとびこむ風景もあの頃のそれとは随分と違うものになっていく。良城小学校横のだから坂こそあまり変らぬものの、日常の喧騒がそのまま持ち込まれ、これが龍蔵寺だったかと目を疑うほど。訪人も稀だったかつての寺の姿はもうそこにはなかった。楓散る石段の中ほどに置かれていた記帳所のノート類も、今は本堂近くに移動しているようだ。何か若い頃書きなぐった覚えがある。今は、「裸說法」「ぼけ封じ三十三観音霊場」とやらの唱い文句で、観光客がひきもきらず、駐車場には「老人会」などの名札をつけた大型バスが二台。土産物店もなかなかの繁盛ぶり、気がつくとも筆者もおはぎに手を出していた。鼓の滝は雨あがりのせいもあるが、流量十分だったが、銀杏は「実を拾わないように」という立看板に少しさみしきそう。樹齢千年といわれる大銀杏は、人の世の変貌をいかに眺めているか。吉敷盆地が夕やみに包まれる頃、龍蔵寺はしばしのやすらぎを取りもどす。



各研究室同窓会紹介

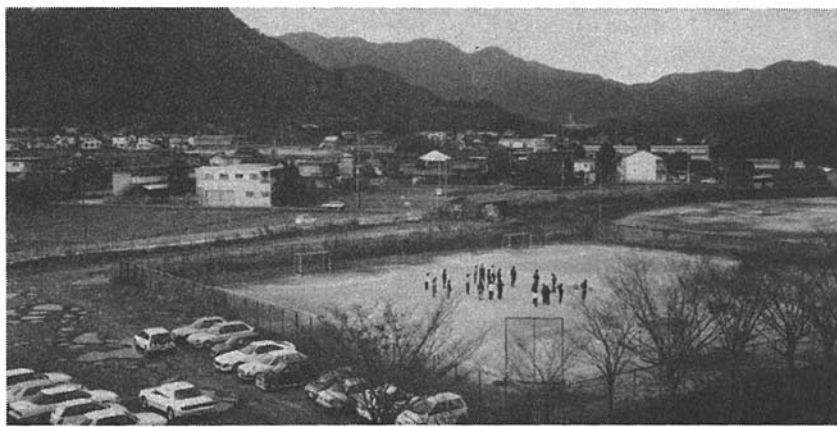
・社会学・社会心理学
一九九〇年六月二日 山泉荘 18人
同窓会総会は、毎年一回山口や同窓会支部のある東京、大阪、広島、福岡で開催されています。出席者は少数ですが、世代を越えたなごやかなコミュニケーションが持たれました。
・西洋史学
一九九〇年十一月十日
いこい絵本店 約20名
今年は例年に比し参加人員は決して多くはなかったが、盛りあがりの点では決して例年に劣らず、2次3次会にくり出した会員もあった。

・国語学・国文学
一九九〇年二月四日
いちやなぎ 約20名
水本、関、柴田、添田の教官四名も出席して開催。ここ数年の中では出席者も多い方だったが、もう少し卒業生の参加が欲しい。年一回第一日曜日に定例化している。
・第九回イギリス会例会
一九九〇年八月十八日
徳山・ますや旅館 11名
恒例により、懇親会の前に次の二つの報告がおこなわれた。

山口大学医療技術短期大学部助教 河野庸二氏(文理・英文第七回卒)
文部省在外研究員としてロンドン大学へ出張(一九八九年十月〜一九九〇年二月)したときの体験談。

山口県立華陵高校教頭

西村崇夫氏(文理・英文第十二回卒)
同校生徒を引率してカナダにホーム・ステイの研修及び、姉妹校締結の交渉などについての報告。
・英語学・英米文学(人文第七回)卒業生同窓会
一九九〇年十月二十日
徳山・あかちようちん 16名



一九九〇年度

人文学部卒業生・
大学院修了生進路状況

人文学部

人文学科

哲学・倫理学

前田証券(株)、(株)字部情報システム、浜
本工芸(株)、(株)ゼニヤ

中国哲学

(株)天満屋(福山店)、ロットテ商事(株)
日本思想史学

有馬商業高校、北九州市役所、山一証
券(株)、(株)山陰合同銀行、住友金属シス
テム開発(株)、(株)ソフトサイエンス、(株)
広島銀行

美学・美術史

(株)大阪三貴、東洋リノリウム(株)(福
岡営業所)、大日本印刷(株)、(株)天満屋、
(株)サンゲツ、小郡商事(株)、千代田生命
保険相互会社、山口大学大学院人文学
科研究科、小田億(株)

国文学

(株)エヌ・ケー・エクサ、情報技術開
発(株)、(株)アイネス、徳山市役所、防府
市役所、福岡女学院高校、山口県庁
(臨時採用)、リコー情報システム(株)、
マツダドジャステクスサービス(株)、中国
郵政局(管内)、大和銀システム開発
(株)

東洋史学

キョーリン薬品(株)、シャープ(株)、(株)九
州リクルート企画、日本電信電話(株)
(中国支社)、ニッセキハウス工業(株)、
(株)レイク(博多支店)、福岡県庁、ニッ
カウイスキー(株)、福岡県庁、(株)日本交
通公社、(株)ぎょうせい(中国支社)
西洋史学

中国日本電気ソフトウェア(株)、(株)サニッ
クス、ジャスコ(株)、(株)富士通九州シス
テムエンジニアリング、(株)字部情報シ
ステム、中国日本電気ソフトウェア(株)、
日本電気情報サービス(株)、(株)西日本コ
ンピュータ、日本サンマイクロシステ
ムズ(株)、山口地方裁判所字部支部

考古学

中国日本電気ソフトウェア(株)、(株)城野
印刷所

社会学

中津市役所、山口大学大学院人文学科
研究科、山口大学大学院人文学科研究
科、(株)アイネス、山口市役所、(株)ユア
ーズ、(株)沖ソフトウェア中国、安川情報
システム(株)、山口市役所、吉田工業(株)、
(株)西洋環境開発、(株)トスコ
社会心理学
(株)システムサンワールド、ハヤシシン
産業(株)、(株)大伸社、東京家庭裁判所、
(株)デンサン、(株)レイク、ジャスコ(株)、
中国新聞社、(株)富士通エフ・アイ・ピー、
(株)オートラマフジ、長崎県教育委員会
(教職員課)

社会人類学

九州ジャスコ(株)、日本団体生命保険(株)、
ロイヤル(株)、日本電気(株)、凸版印刷(株)、
日本放送協会、(株)日本交通公社

語学文学科

国語学

中国日本電気ソフトウェア(株)、(株)キム
ラタン、内浦開発(株)、イー・アンド・
アイシステム(株)、山口県鴻城高校(臨
時)、オリックス(株)、山口大学大学院
人文学科研究科、(株)アイビー化粧品
国文学
新生住宅(株)、ユニバーサル証券(株)、沖
電気工業(株)、山口県教員(高校)、大
分県教員(臨時採用)、神戸大学大
学院教育学研究科、(株)毎日コミュニケー
ションズ、奈古高校(須佐分校)、山
口県鴻城高校(臨時)

中国語学・中国文学

(株)第一学習社、日宝土地建物(株)、(株)三
友、日本通運(株)(中国支店)、宮崎西
高校、プラス(株)

英語学

広島トヨベツト(株)、(株)ポッカコーポレー
ション、下松市役所、岡山大学大学院
教育学研究科、鹿野高校、西京銀行、
(株)天満屋(広島店)、山口放送(株)、(株)
インターナショナルツアーズ、(株)ノエ
ビア、(株)日本旅行、山口高校(定時制)、
(株)ジェーシービー

英米文学

大分県教員(高校)(臨時採用)、九
州地方更生保護委員会福岡保護観察所、
尾道市役所、(株)ノエビア、防府西高校、
西日本シンクタンク(株)、日本クレジッ
トサービス(福岡営業所)、大分県
教員(高校)、日本ユニシス(株)、シー・
イー・アイシステム(株)、マツダ(株)

ドイツ語学・ドイツ文学

大日本印刷(株)、山口県労働金庫、日本
ナレッジインダストリー(株)、世一観光(株)、
親和銀行、西鉄旅行(株)
フランス語学・フランス文学
熊本国税局、(株)ミキハウス、(株)鷗州社、
田布施町役場、(株)イーオン、住友林業
(株)(住宅事業部)、山口県教員(中学)、
(株)デンサン、下関市役所、(株)リクルー
トコンピュータプリント、山口市農業
協同組合

言語学

日立ソフトウェアエンジニアリング(株)、
雇用促進事業団、西日本シンクタンク
(株)、安川情報システム(株)、福岡県教員
(中学)、(株)リクルートフロムエー、聴
講生(山口大学人文学部)

大学院人文学科研究科

地域文化

岡山県教育委員会(県立図書館・司書)、
山口県教員(高校)、キャセイパシフィッ
ク航空会社、凸版印刷(株)

会費未納の方のみ振替用紙を
同封致しております、なにとぞお
納め下さいますようお願いいた
します。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座
下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	計
人文学科			4	18	105 (60)	103 (57)	132 (62)	105 (59)	466 (238)
語学文学科		1	5 (2)	4 (2)	84 (64)	83 (65)	97 (79)	98 (78)	373 (290)
研究科						3	7 (1)	8 (3)	18 (4)
聴講生								4 (1)	4 (1)
研究生							1	4 (1)	5 (1)
計		1	9 (2)	22 (2)	189 (124)	189 (122)	237 (142)	215 (141)	862 (533)

一九九〇年度
人文学部在籍学生数
(一九九〇年十月一日現在)

【役員】 (1990年11月11日選出)

名誉会長 …… 八木 充 (山口大学人文学部長)
 会長 …… 大塚 博久 (中国哲学、第4回卒、山口大学教育学部)
 副会長 …… 森田 良吉 (国史学、第4回卒、山口高校)、有馬正人 (西洋史学、第4回卒、徳山海陸運送)
 委員

(哲学・倫理学) 谷本 育紀 (第12回卒、宇部中央高校)
 (中国哲学) 大野 光生 (第4回卒、山口高校)
 (日本思想史学) 中川 省司 (人第8回卒、萩土木事務所)
 (美術・美術史) 橋本 陽子 (人第6回卒)
 (国史学) 八木 充 (第2回卒、山口大学人文学部)
 (東洋史学) 三好 信男 (第6回卒、山口高校)
 (西洋史学) 米屋 広志 (第8回卒、防府商業高校)
 (考古学) 磯部 貴文 (人第3回卒、山口市教育委員会)
 (社会学・社会心理学・社会人類学) 宮藤 隆夫 (第15回卒、山口県庁)
 (国語学・国文学) 小田 稜亮 (第2回卒、山口鴻城高校)、有近八重子 (第2回卒)
 (中国語学・中国文学) 藤満 通 (第6回卒、山口高校)
 (英語学・英米文学) 和田 敏英 (第1回卒、山口大学人文学部)、齊藤 稀 (第3回卒、宇部工業高専)
 (ドイツ語学・ドイツ文学) 杉山 勇次 (第7回卒、山口市役所)
 (フランス語学・フランス文学) 福井 真典 (人第6回卒、山口市役所)
 (言語学) 山口 敦 (人第6回卒、豊北高校)

監事

竹内 通弘 (英米文学、第2回卒、山口高校)、芳西 靖幸 (社会学、第11回卒、防府養護学校)

幹事

田中 晋 (英米文学、第14回卒、山口大学人文学部)
 岡光 一浩 (ドイツ文学、第14回卒、山口大学人文学部)
 添田建治郎 (国文学、第17回卒、山口大学人文学部)
 佐々木 衛 (社会学、第19回卒、山口大学人文学部)

* 編集後記 *

○例年になく(このところ度々この台詞を口にしますが)暖かい冬、しかし、世界は、この一年まさに激動の名にふさわしい情勢の展開をみせました。東欧社会の大変革、東西ドイツの統一など、戦後生まれの編集子には夢想だにできなかった事態が矢つき早。日本の政治の舵取りもしっかりしてもらわねば困ります。

○会員の皆さまにはお元気ですか。本号は山口点描を復活、四辻の長沢の池と吉敷の龍蔵寺を紹介。おでん屋一八などを次号あたりで訪問してみたいと考えております。

○本号は会員の方から寄せられたお便りが少く、同窓会報本来の「会員相互の交流」といった目標からみると十分でなかったかもしれません。反省しております。

(K・S)

